

図6 高地性集落出土資料5

歯文をもつもので、讃岐西部に多く見られるものである。141は、広口壺の口縁部上端を継ぎ足すことで複合口縁壺とするもので、讃岐西部に類例がみられる。甕(142)は胴部が強く張り、内面ケズリの上位に及ぶことからみて終末期に下る資料であろう。鉢(143)は、形態や調整からみて、後期後葉以降の備中・備後系の資料と考えられる。

これらの烏帽子山出土資料は、中期Ⅱ-2期から後期Ⅰ-2期までの時間幅をもつ。後期後葉から終末期の資料は、後期Ⅰ-2期から一定期間を経たもので、中期中葉段階から後期前葉段階の高地性集落とは異なるものであろう。讃岐で後期後葉から終末期に山頂立地の集落は烏帽子山以外では殆ど知られていない。

(9) 上佐山(図6-144)

上佐山(標高256m)は、高松平野南部に位置する。既往の報文^(註20)において高地性集落の存在が指摘されていたが、土器等の考古資料が不明であった。実査を行った結果、少量の土器片を採取したため、図化可能な資料1点を提示しておく。

144は大きく開く形態や厚みから判断して、高杯若しくは台付鉢の上半部と考えられる。詳細な時期決定は困難であるが、中期後葉の資料として違和感がない。

(10) 稲荷山(図6-145～150)

稲荷山(標高166m)は、高松平野北部にある石清尾山山塊の東部の支峰の一つである。稲荷山には、古墳時代前期の4基の積石墳が所在し、この内、稲荷山南塚古墳の調査で弥生土器が出土している^(註21)。

145・146は壺であり、145は胴部最大径付近に櫛描文原体による列点文を施す。壺底部(146)は薄い器壁や底胴部界が明瞭であるなど、凹線文盛行期の特徴をもつ。甕口縁(143)は強いヨコナデにより口縁端部が上方に拡張され、同外面には2条の凹線文が施される。甕底部(149)は直

立気味に立ち上がる形態や胎土の特徴からみて、口縁部(147)と同一個体の可能性が高い。150は壺口縁の可能性はあるが、垂下口縁の高杯とみる。

稲荷山出土資料は、中期Ⅱ-1期～Ⅲ-1期にまとまると考えられる。

(11) 屋島(図6-151～179)

屋島(標高292m)は、高松平野北東部の備讃瀬戸に突き出した開析溶岩台地(メサ)であり、近世以降の干拓により地続きとなる以前は、島若しくは陸繋島であった。山上はメサ特有の平坦地が南北に延び、それぞれ北嶺・南嶺と呼ばれている。最高所は南嶺にあり、古代山城の屋嶋城や屋島寺境内の発掘調査において、弥生土器が出土している^(註22)。

151は広口壺、152～154は口縁部下に貼付突帯を巡らす細頸壺である。155～157は直口壺、158の広口壺は口縁部内面に貼付突帯により受口状の加飾をもつ。165～169は甕口縁であり、165・167は短口縁であるが、166・168・169は強い横ナデによる跳ね上げ口縁をもつ。171～174の甕底部は内面が突状となるものである。177は外面に櫛描文をもつジョッキ形の鉢、178・179は台付鉢の脚部と考えられる。

屋島出土資料は、いずれも凹線文がみられないものであるが、形態的特徴から凹線文出現期の資料が含まれると考えられることから、中期Ⅱ-1期～中期Ⅱ-2期を中心とする資料と推定される。

(12) 五剣山(図7-180～184)

五剣山(標高375m)は、高松平野北東部の庵治半島に所在する山塊で、山上が差別浸食を受けた火山角礫岩・凝灰角礫岩の南北五つの峰から成ることに由来する。北寄の峰頂部の直下の東側斜面から弥生土器・石器が採取されており、だんべら遺跡として知られている^(註23)。峰頂部は浸食作用により狭隘な岩塊となっており、これらは同部からの転落資料と考えられる。

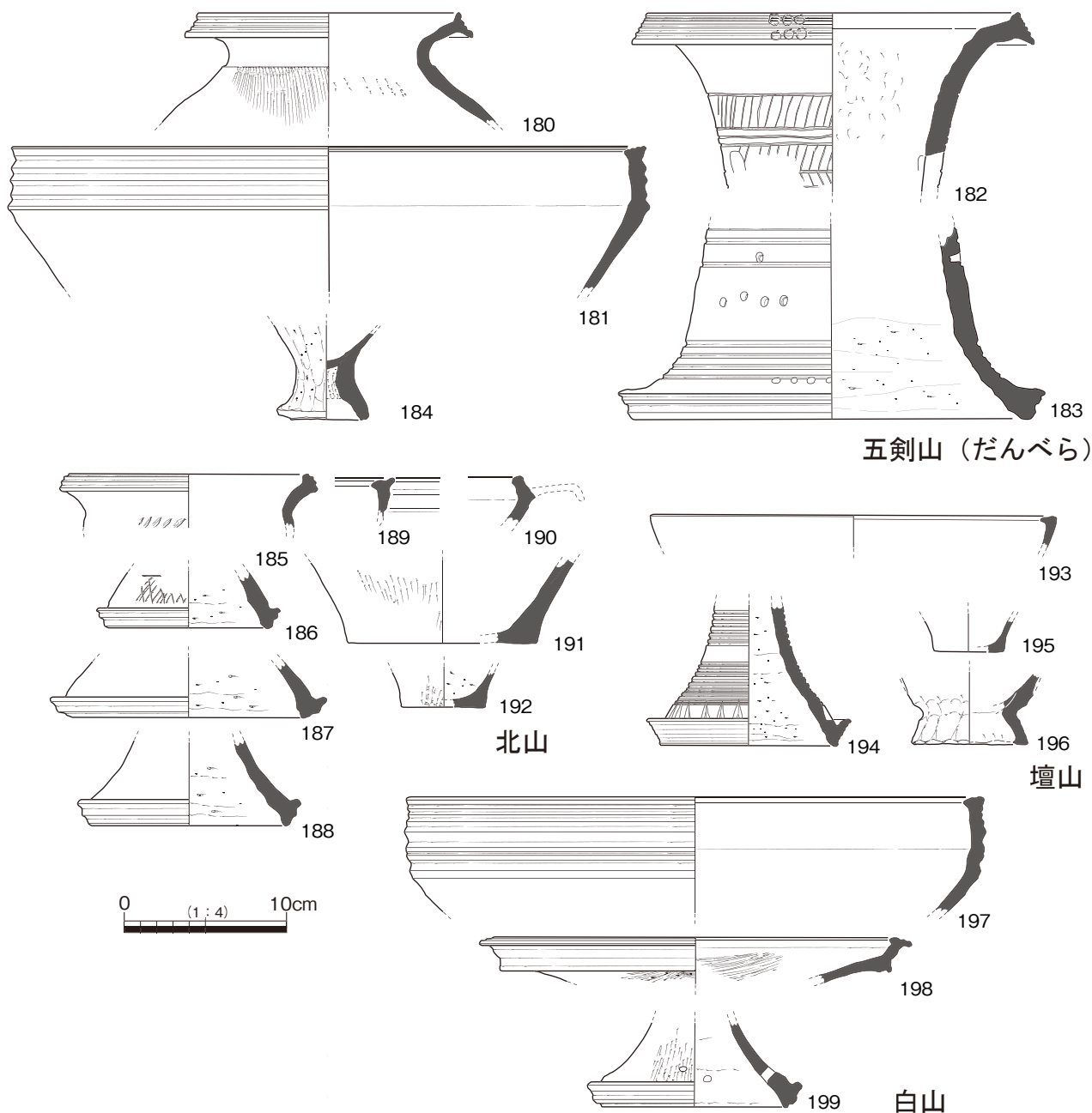


図7 高地性集落出土資料6

180は短頸広口壺、181は大型鉢である。182・183は器台、184は製塩土器の脚部片である。

五剣山（だんべら遺跡）出土資料は、形態や製塩土器^(註24)からみて後期I -1期に比定できる。

(13) 北山 (図7-185～192)

北山（標高288m）は、讃岐東部の播磨灘に突き出した開析溶岩台地（メサ）である。比較的平坦となる山上から弥生土器・石器が採取され、既

往の研究^(註25)においても高地性集落の存在が指摘されているが、資料図は公表されておらず、今回、時期比定可能な土器資料^(註26)を報告する。

185は短頸広口壺であり、口縁端部に3条の凹線文、頸部にハケ原体による列点文を施す。186～188は高杯脚部片であり、凹線文盛行期の形態が膨らむ（186・187）と、端部の拡張から後期初頭の下る（188）がみられる。189は鉢口縁、190は垂下口縁の高杯とみられる。191・192は甕底部

であるが、中期中葉にみられる形態的特徴をもっている。

北山出土資料は、中期Ⅱ-2期から後期Ⅰ-1期の時間幅で捉えられる。

(14) 壇山 (図7-193～196)

壇山(標高400m)は、備讃瀬戸北東部に位置する豊島に所在する山塊であり、開析溶岩台地(メサ)により台形の山容を呈する。既往の研究^(註27)においても高地性集落として挙げられており、詳細な出土地点は不明であるが弥生土器が表採されている^(註28)。

193は台付鉢の口縁部。194は高杯脚部であり、外面には最下段に未貫通の三角形透孔とその上位に多条の凹線文帯を施す。195は内面が突状となる甕底部片。196は製塩土器とみられるが、外面はケズリに伴う砂粒移動の痕跡がみられない。

壇山出土資料の帰属時期は、中期Ⅱ-1期から中期Ⅱ-2期の台付鉢(193)や甕底部(195)と、中期Ⅲ-2期の凹線文が発達する高杯脚(194)に分けられる。製塩土器(196)^(註29)は、高杯脚(194)に伴う資料と考えられる。

(15) 白山 (図7-197～199)

白山(標高203m)は、高松平野東部と東讃の長尾・大川地域との境界付近に所在する。山頂及び山麓部の数地点に弥生集落の分布が知られ、山頂部は高地性集落として報告^(註30)されているものである。山頂より出土した土器の概略については、既往の報告で確認できるが、本稿では実物資料の確認が可能な3点に絞って再提示する^(註31)。

197は鉢であり、外面には多条化した凹線文帯が確認できる。讃岐地域内においてこれほどまでに凹線文が発達する鉢の類例はあまりみない。198・199は高杯であり、胎土中に角閃石を多く含む。

白山出土資料の帰属時期は、凹線文盛行期のⅢ-2期からⅢ-3期とみられる鉢(197)と、後期Ⅰ-1期に下る高杯(198・199)と考えられる。

2 その他の高地性集落出土土器

これらは、既往の報告資料のうち、現在、所在不明のため実物の確認が行えなかったものであり、ここでは参考資料として提示することとした。

(16) 心経山 (図8～12)

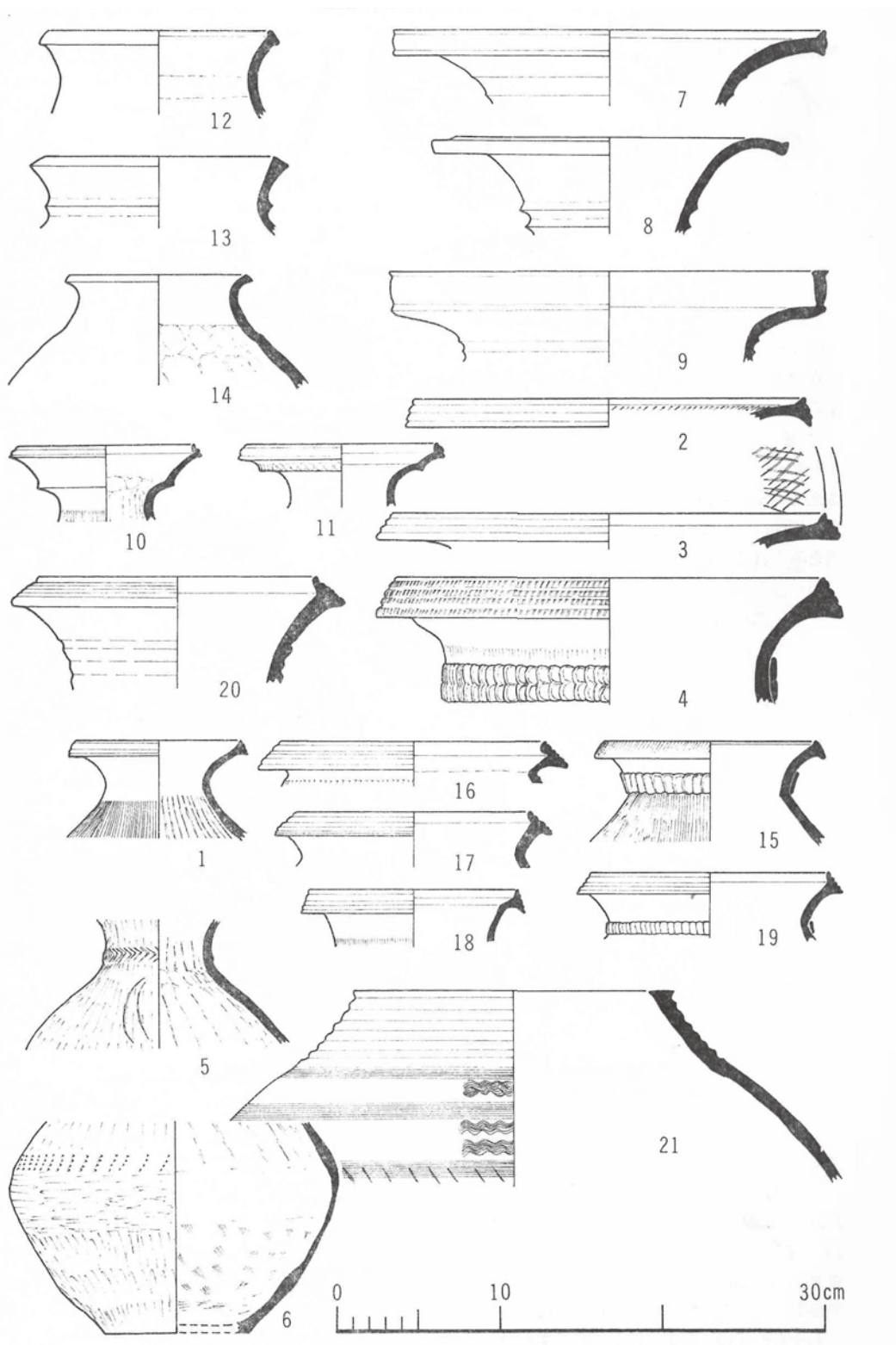
遠藤順昭・町田章による昭和30(1955)年の発掘調査資料^(註32)。発掘区は石切場(第1区、詳細場所不明)と山頂下西南斜面(第2区)の2地点の土器等が資料化されている。

これらの資料の帰属時期は、既往の報告において指摘されているとおり、その多くが中期中葉(紫雲出山Ⅰ式)^(註33)から中期末葉(紫雲出山Ⅲ式)とみられ、筆者の編年では中期Ⅱ-1期から中期Ⅲ-3期に相当するものである。しかし、少数であるが、後期初頭の後期Ⅰ-1期に下る資料(図9-40.42.53～54.59)が含まれている。また、土器様式の特徴は、児島及び吉備南部とみられる口縁部の上方への拡張が顕著な広口壺(図8-20)や甕(図8-16)、脚部上端摘まみ出し、三角形透(図11-98.100)や円形多孔透(図11-92)をもつ高杯又は台付鉢等、直立する口縁部外面に多条の凹線文をもつ高杯又は台付鉢(図10-72～74、図11-82～84)や、燧灘沿岸に分布する短い頸部から口縁部が小さく開く広口壺(図8-1)など、四国側讃岐西部であまりみられない他地域の特徴をもつ資料がみられる。

口縁部が短く開く壺(図8-14)は与島の西方遺跡や児島の城遺跡など、備讃瀬戸島嶼部において少数確認できるものである。

(17) 鷲ヶ峰<女木島> (図13)

女木島は、高松市の沖合約5kmの中部備讃瀬戸の島嶼の一つである。島の北部には鷲ヶ峰(標高187m)があり、昭和6(1931)年の展望台建設に伴い、山頂やや下の南西斜面で貝塚が確認されており、出土品は新海功^(註34)、城福勇^(註35)により



遠藤順昭・町田章 1970 「讃岐広島心経山の弥生遺跡」『古代学』17 卷 2 号より転載

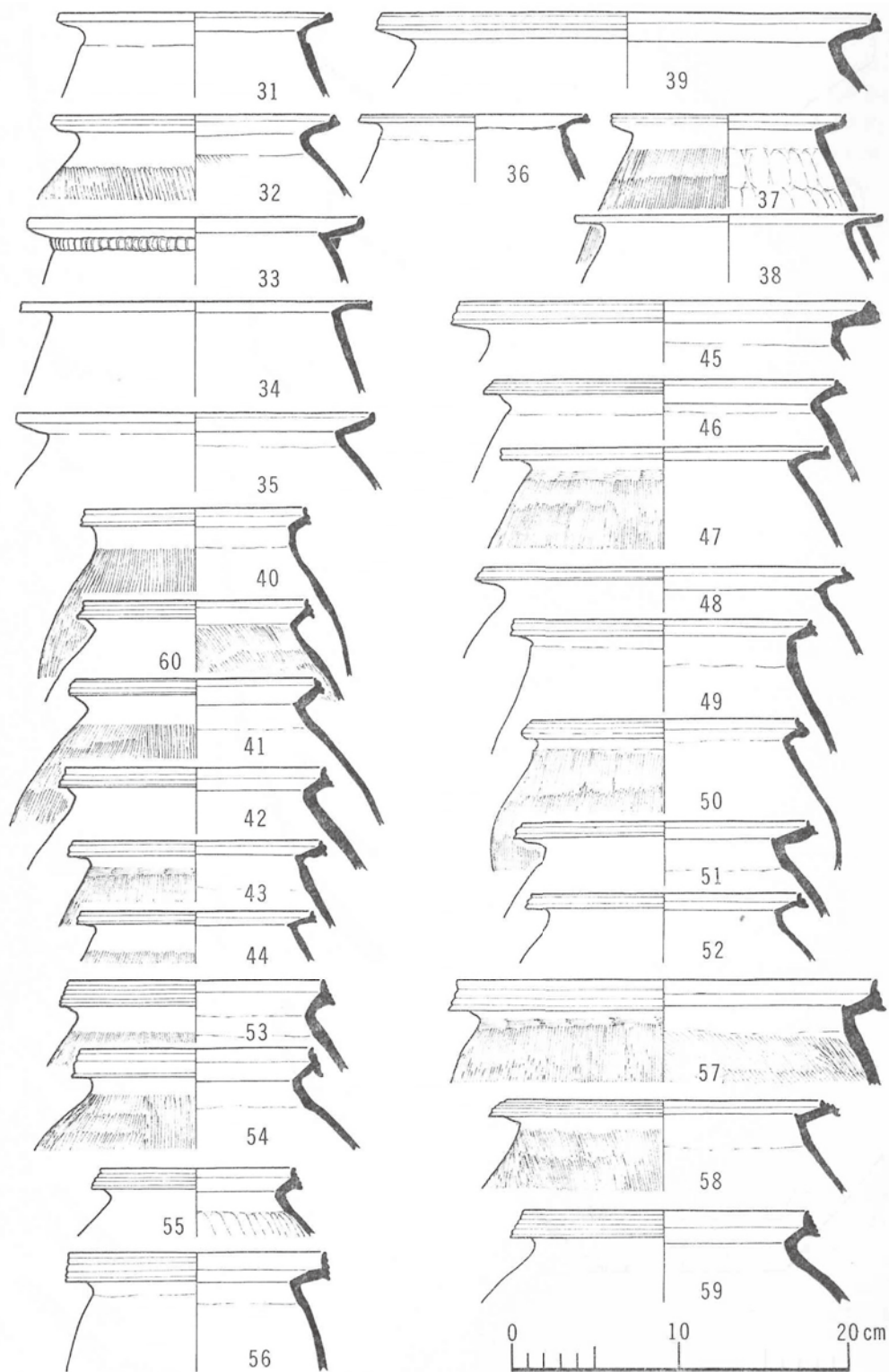
図8 既往の報告資料1（心経山その1）

報告されている。

Ⅱ-2期から中期Ⅲ-2期におさまるものとみられ

図面等からの判断ではあるが、出土土器は中

る。



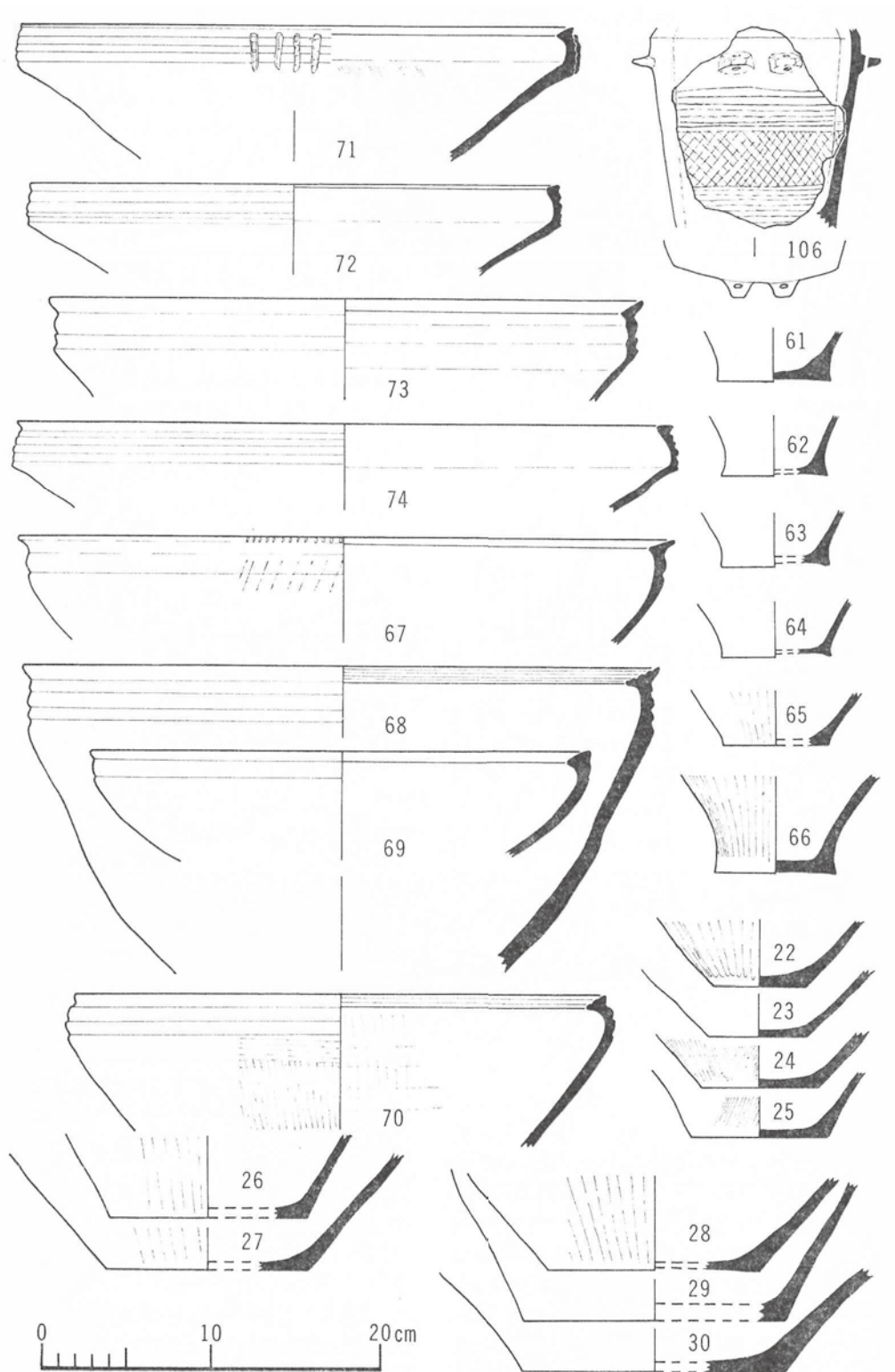
遠藤順昭・町田章 1970 「讃岐広島心経山の弥生遺跡」『古代学』17 卷 2 号より転載

図9 既往の報告資料2 (心経山その2)

(16) 伽藍山 (図 13)

伽藍山 (標高 216 m) は、高松平野南西部に位置する。上部が安山岩に覆われた円錐形の山容をもち、山頂から弥生土器・石器が採取されている^(註36)。

出土土器は広口壺口縁、底部から成り、形態的特徴から中期Ⅲ-1期から中期Ⅲ-2期に比定される。



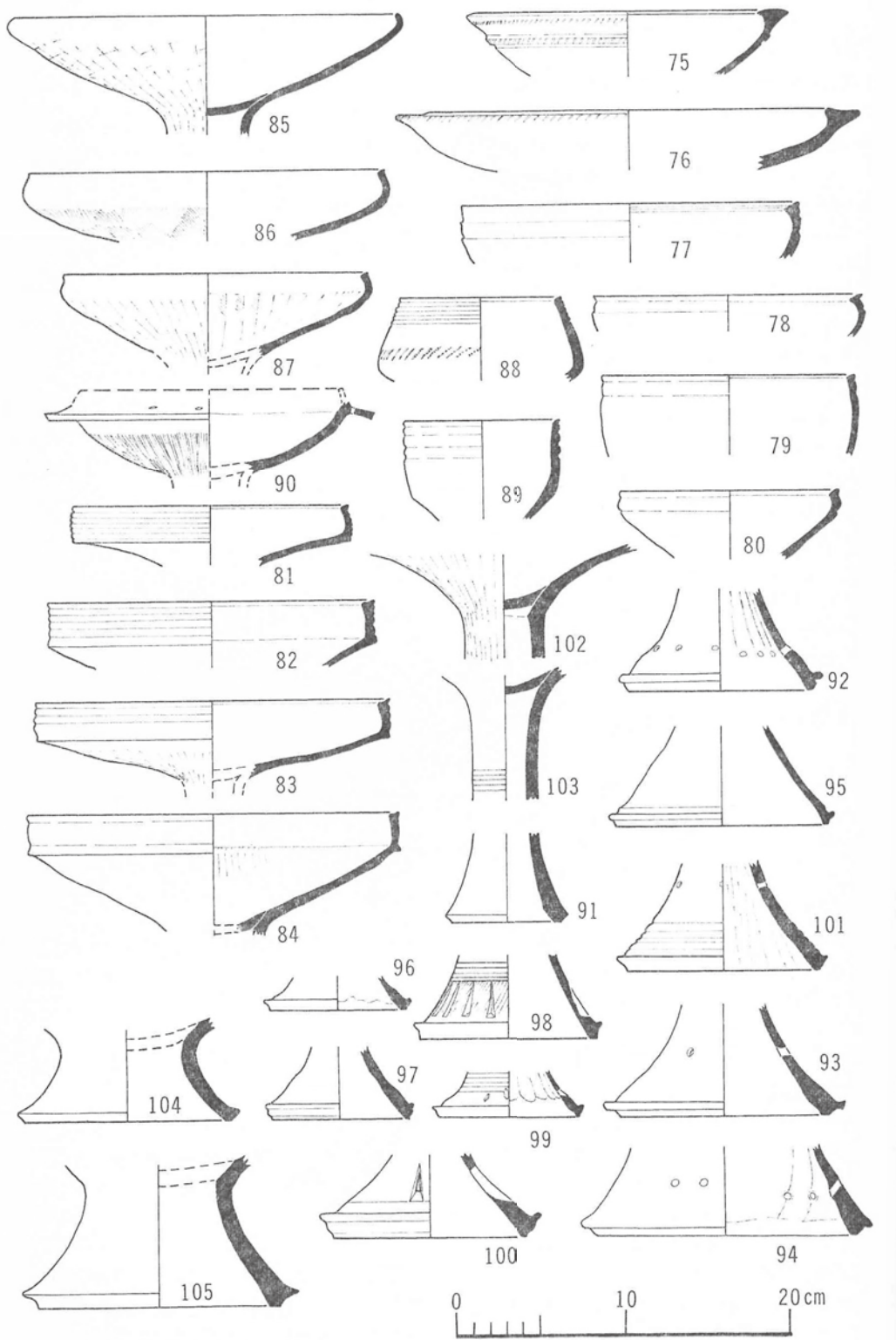
遠藤順昭・町田章 1970 「讃岐広島心経山の弥生遺跡」『古代学』17 卷 2 号より転載

図 10 既往の報告資料 3 (心経山その 3)

おわりに

本稿では、讃岐地域の高地性集落出土資料のうち、土器について資料化と既往報告資料の集成を行った。全体での土器の帰属時期は、烏帽子山を

除いて弥生時代中期中葉（中期Ⅱ-1 期）から後期初頭（後期Ⅰ-1）に収まるものであり、中でも、細別時期における中期Ⅱ-2 期から中期Ⅲ-2 期の資料が多い（表 1 上段）。

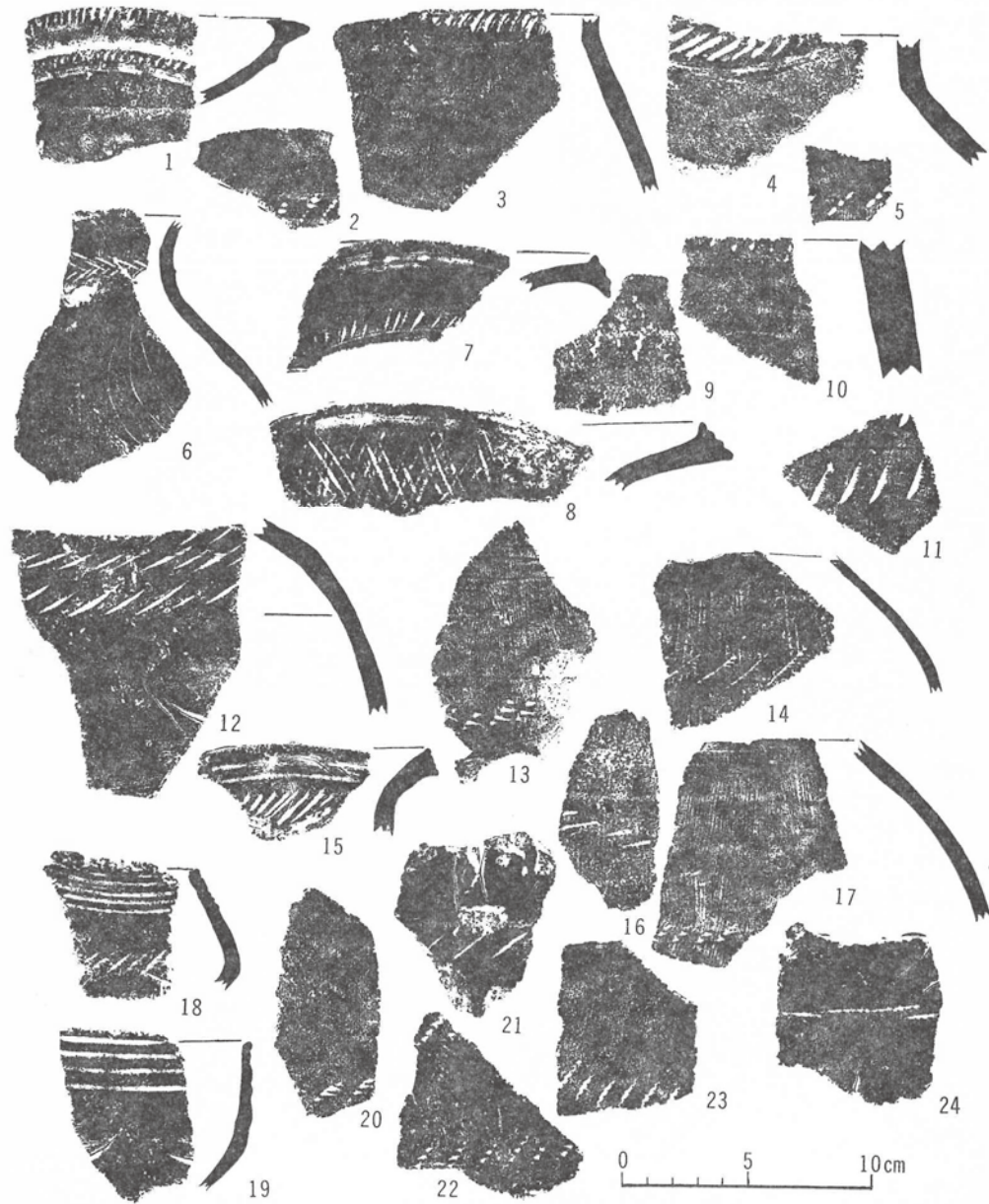


遠藤順昭・町田章 1970 「讃岐広島心経山の弥生遺跡」『古代学』17 卷 2 号より転載

図 11 既往の報告資料 4 (心経山その 4)

しかし、これらは表面採集等の発掘調査を
経ていないものが多く、各高地性集落の時期を限定する
には至らない。一定量の土器資料が得られてい

る紫雲出山遺跡の土器出土量の変遷と、本稿にお
ける他の高地性集落出土土器の时期的な傾向が一
致することからすれば、備讃瀬戸の高地性集落は、



遠藤順昭・町田章 1970 「讃岐広島心経山の弥生遺跡」『古代学』17 卷 2 号より転載

図 12 既往の報告資料 5 (心経山その 5)

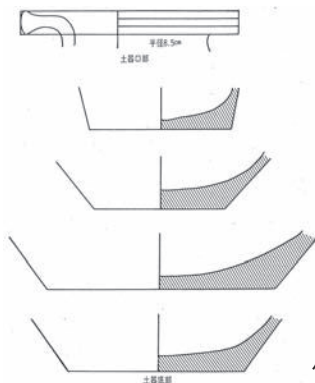
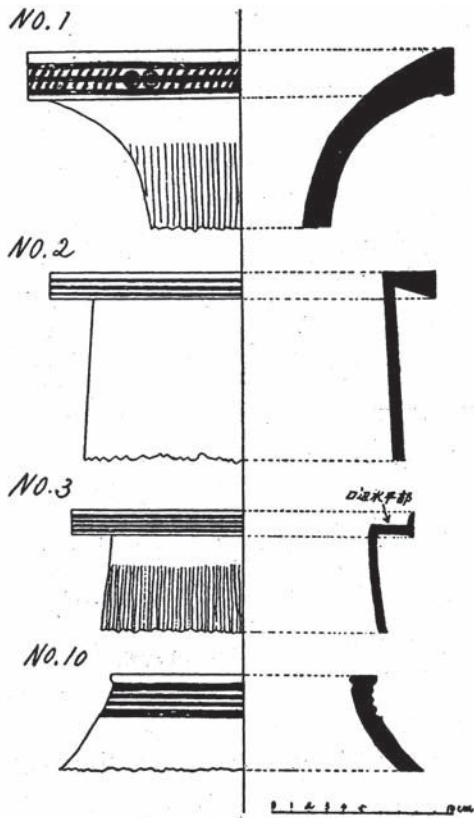
個別的ではなく、全体の関係性の中で出現・経営・廃絶したと考えられる。筆者は、このような高地性集落の機能を、立地や土器様式などの考古資料からみて、「烽火」などを用いた交流・交易における通信・伝達に特化した集落と推定している^(註 37)。また、その経営にあたっては、土器等の必要物資を通信・伝達先となる平野部の拠点集落から供給を受けていたと考える^(註 38)。

今後は、本稿における土器資料の胎土分析等を

進め、高地性集落の経営主体やその実態について分析を進めていきたい。

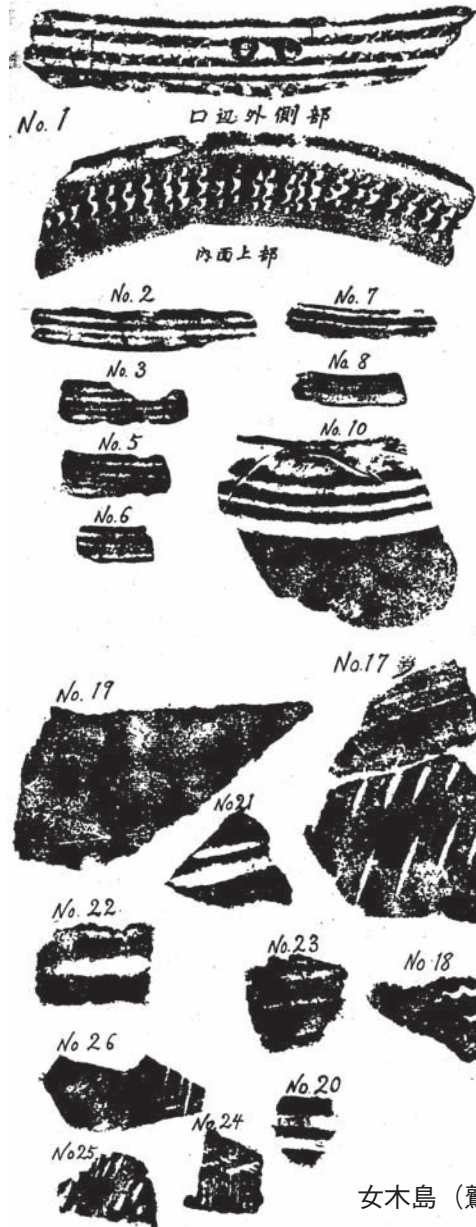
本稿を成すにあたり、以下の方々の協力を得た。記して感謝申し上げます。

高上 拓 松浦暢昌 松田朝由 眞鍋一生
山下舞子



伽藍山

檀紙村誌研究会・檀紙村誌編集委員会 1986 『檀紙村誌』より転載



女木島（鷺ヶ峰貝塚）

新開功 1933 『讃岐國女木島鷺ヶ峰貝塚小報』『人類學雜誌』第48卷第1号より転載



女木島（鷺ヶ峰貝塚）

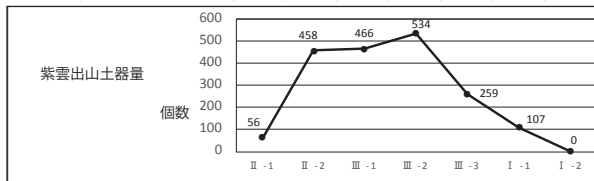
城福勇編 1957 『女木島の歴史』地方史研究会報第3号 ※縮尺不明
香川大学学芸部内地方史研究会より転載

図 13 既往の報告資料6（鷺ヶ峰・伽藍山）

表1 各高地性集落と紫雲出土器量の変遷

地域区分	遺跡名	中期					後期	
		II-1	II-2	III-1	III-2	III-3	I-1	I-2
讃岐西部	紫雲出山							
	大麻山(野田院)							
	青ノ山							
	飯野山							
	城山							
	烏帽子山							
讃岐東部	北峰(たんべ)							
	伽藍山							
	稲荷山							
	上佐山			?	?	?	?	
	屋島							
	五剣山(だんべら)							
児島・島嶼部	白山							
	北山							
	高見島			?	?	?		
	心経山							
	西方							
	鷲ヶ峰貝塚							
	壇山							
	北庄			?	?	?		
	屋ヶ城			?	?	?		
	大山神社							
	貝殻山							
	的場山							
	王子ヶ岳			?	?	?		
	岩滝山			?	?	?		
神道山								
福南山			?	?	?			
種松山								
時期決定可能遺跡数	6	13	16	13	11	8	1	

時期区分	II-1	II-2	III-1	III-2	III-3	I-1	I-2
紫雲出土器量	56	458	466	534	259	107	0



- 註1 小林行雄・佐原真 1964『紫雲出』香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究 詫間町文化財保護委員会
- 註2 遠藤順昭・町田章 1970『讃岐広島心経山の弥生遺跡』『古代学』第17巻第2号 古代学協会 96-109頁
- 註3 六車恵一 1979『香川県域』小野忠熙編『高地性集落の研究』資料編 学生社 439-481頁
- 註4 近藤義郎・小野昭 1979『岡山県貝殻山遺跡』小野忠熙編『高地性集落の研究』資料編 学生社 864-892頁
- 註5 信里芳紀 2005『讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年-凹線文期を中心として-』『香川県埋蔵文化財センター 研究紀要I』香川県埋蔵文化財センター 33-62頁
- 註6 信里芳紀 2019『第6章特論第1節 紫雲出山遺跡の土器・鉄器の特性』『紫雲出山遺跡』三豊市教育委員会 227-244頁
- 註7 香川県埋蔵文化財センター所蔵資料 丸亀市教育委員会 1984『青ノ山8号・9号墳発掘調査概報』香川県丸亀市青ノ山山頂所在の後期、終末期古墳の調査
- 註8 丸亀市立資料館所蔵資料
- 註9 野田院は史料上では確認できず、廃寺化した山林寺院の伝承からの地名と考えられる。
- 註10 普通寺市教育委員会所蔵資料。野田院古墳整備事業に伴う発掘調査の出土品の一部は下記文献で公開されている。出土品コンテナ約80箱の未報告資料(壺形埴輪・古瓦片等)から、弥生土器を抽出した。善通寺市教育委員会 2003『史跡有岡古墳群(野田院古墳)保存整備報告書』
- 註11 香川県埋蔵文化財センター所蔵資料(川畑迪寄贈資料)。採取土器や石器(打製石庖丁)など一部に墨書で「城山山頂」、「城山山頂地神社」「城山山頂地神社南谷」の注記がある。「地神社」の場所の特定はできないが、本稿ではこれら山頂出土資料としてまとめて取り扱う。ほかに城山での弥生土器の出土を報じた文献として、六車恵一氏は山上北部(古代山城城門付近)を挙げている。六車恵一 1956『讃岐彌生式土器集成図録』『文化財協会報』特別号第1集 香川県文化財保護協会 48-69頁
- 註12 香川県埋蔵文化財センター所蔵資料(川畑迪寄贈資料)。同資料には、弥生土器や打製石鏃の外に、縄文期の凹線式石鏃がある。

- 註13 実査では、鞍部南側の王頭山(標高312m)に向かう稜線上においても遺物散布が認められ、これら山塊の複数地点に遺構が展開することが予測される。
- 註14 前掲註2文献
- 註15 丸亀市資料館所蔵資料(瀬戸内海歴史民俗資料館旧蔵資料 図1-27~32)、さぬき市所蔵資料(六車恵一寄贈資料、図1-34.35)
- 註16 香川県埋蔵文化財センター所蔵資料 香川県教育委員会 1979『与島西方遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告(I)
- 註17 岡山県教育委員会 1977『倉敷市(児島)城遺跡発掘調査報告-県立児島高校移転用地造成に伴う発掘調査-』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(19) 報告書番号448、481~483
- 註18 香川県教育委員会編 1983『新編香川叢書考古篇』197-202頁
- 註19 坂出市教育委員会 1994『坂出市内遺跡発掘調査報告書』平成5年度国庫補助事業報告書 烏帽子山遺跡 南谷遺跡 横山廃寺 坂出市教育委員会 1999『坂出市内遺跡発掘調査報告書』平成10年度国庫補助事業報告書 史跡城山 烏帽子山遺跡 坂出市教育委員会 2003『坂出市内遺跡発掘調査報告書』平成14年度国庫補助事業報告書 烏帽子山遺跡 開法寺遺跡
- 註20 香川県埋蔵文化財センター所蔵資料(瀬戸内海歴史民俗資料館旧蔵資料)
- 註21 前掲註3文献
- 註22 これまで石清尾山山塊では、前掲註3文献をはじめ、峰山北側の鞍部の播鉢谷遺跡で中期後半に属する土器や石器が採取されていることを根拠として、同遺跡を高地性集落として認定する見解がみられる。しかし、遺跡の立地は当該期の讃岐地域で多く見られる谷奥部を利用するものであり、筆者は高地性集落に含める立場を採らない。播鉢谷遺跡出土資料は、以下の文献で報告されている。高松市教育委員会 1973『石清尾山塊古墳群調査報告』
- 註23 高松市教育委員会所蔵資料 高松市教育委員会 2003『史跡天然記念物屋島』史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書I 高松市埋蔵文化財調査報告第62集
- 註24 高松市教育委員会 2007『屋島寺』屋島寺宝物館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書高松市埋蔵文化財調査報告第107集
- 註25 高松市教育委員会 2008『屋嶋城跡II』史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書II 高松市埋蔵文化財発掘調査報告第113集
- 註26 高松市教育委員会所蔵資料『香川県埋蔵文化財包蔵地調査カード』昭和47(1972)年 庵治町 No.002 高松市 2007『庵治町史』
- 註27 大久保徹也氏の備讃I式(古相)に比定できる。大久保徹也 2002『第6章まとめ 鷺野神社境内遺跡の消長と土器製塩の展開-』『鷺野神社境内遺跡』高松市教育委員会・徳島文理大学文学部連携協定調査報告第5冊 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書IV 高松市埋蔵文化財調査報告第236集 27-35頁
- 註28 前掲註3文献
- 註29 さぬき市歴史民俗資料館所蔵資料。図示した土器類以外に、数10点の打製石鏃がある。
- 註30 前掲註3文献
- 註31 土庄町教育委員会所蔵資料(森井正資料)
- 註32 大久保徹也氏の備讃I式に比定できる。前掲註24文献。
- 註33 前掲註3文献
- 註34 さぬき市所蔵資料(六車恵一寄贈資料)のうち、六車 1956において白山山頂と提示された図面と実物資料の照合が可能であった3点を提示する。六車恵一 1956『讃岐彌生式土器集成図録』『文化財協会報』特別号第1集 香川県文化財保護協会 48-69頁
- 註35 前掲註2文献
- 註36 佐原真 1964『第3章第3節土器の相対年代』(前掲註1文献所収)
- 註37 新海功 1933『讃岐國女木島鷺ヶ峰貝塚小報』『人類学雑誌』第48巻第1号 43-52頁
- 註38 城福勇 1957『女木島の歴史』香川大学学芸部内地方史研究会 高松市役所女木支所
- 註39 檀紙村誌研究会・檀紙村誌編集委員会 1986『檀紙村誌』(土器・石器図面) 香川県 1987『香川県史』第13巻資料編 考古
- 註40 信里芳紀 2022『備讃瀬戸における高地性集落と其の背景』『古代文化』第74巻第2号2号
- 註41 信里芳紀 2019『第6章特論第1節 紫雲出山遺跡の土器・鉄器の特性』『紫雲出山遺跡』三豊市教育委員会

香川県内出土須恵器の産地推定

白石 純・森本 蓮（岡山理科大学）

はじめに

この報告では第1表に示した5遺跡から出土した7世紀後半から14世紀の須恵器の理化学的な胎土分析を実施し、十瓶山窯跡群で生産されたものなのか、あるいは他地域から搬入されたものなのかを検討した。

これまで県内の須恵器の胎土分析では、古墳時代を中心とした綾南町周辺の窯跡出土須恵器の胎土分析（三辻・渡部 1992）が行われている。今回の胎土分析では、綾歌郡綾川町から坂出市府中町にかけて分布する十瓶山窯跡群出土須恵器（7世紀中頃～14世紀）の流通について検討した。なお、十瓶山窯跡群の窯跡出土須恵器については、すでに報告しており、この窯跡群内での胎土を比較検討したところ、窯跡の立地、時期によって胎土が異なることが推定された（森本・白石 2020）。また、生産地試料としては、十瓶山窯跡群以外に岡山県瀬戸内市邑久窯跡群の試料も比較試料として分析した。

1 分析方法・試料

測定装置、条件、試料は以下の通りである。

測定装置：エネルギー分散型蛍光 X 線分析計（日本電子 JSX-3202EV）を使用。

測定条件：X 線照射径 2.5mm、電流 50～200 mA、電圧 50kV/15vK、測定時間 200 秒、測定室内は真空状態で分析した。

測定元素：SiO₂・TiO₂・Al₂O₃・Fe₂O₃・MnO・MgO・CaO・Na₂O・K₂O・P₂O₅ の 10 元素である。

測定試料：裁断機で一辺が 1cm 前後の大きさにカットし、試料表面についた汚れを研磨機で除去したあとに乾燥。乾燥し試料をタンゲステンカーバイト製の乳鉢で

粉末（100～200メッシュ）にしたものをリングに入れ、加圧成形機で約 10 トンの圧力をかけて成形した試料を測定試料とした。従って一部破壊分析である。

分析した遺跡出土須恵器は、第1表に示した 53 点で、器種としては杯、高杯、壺、甕、椀などである。

2 分析結果と考察

分析結果は、特に差がみられた CaO と K₂O の元素から散布図を作成して検討した。

産地推定を実施した遺跡は第1表に示した5遺跡で、坂出市の讃岐国府跡、高松市の多肥松林遺跡・多肥北原西遺跡・多肥北原遺跡、綾川町の西末則遺跡である。遺跡の性格としては、讃岐国府が官衙跡、その他は集落遺跡である。

讃岐国府跡

第1図（K₂O-CaO 散布図）では、讃岐国府より出土した須恵器（第6図1～16）の産地推定を行った。その結果、分析番号1、2、7、13以外はすべて十瓶山窯跡群の領域に分布した。そして1（杯蓋）、13（皿）は十瓶山窯跡群と邑久窯跡群が重なる領域に分布した。また、2（椀）、7（高杯）は両方の産地には分布しなかった。

多肥松林遺跡

第2図では、多肥松林遺跡より出土した須恵器（第6図17～25）の産地を推定した。すると19、21、22の杯蓋以外は、十瓶山の領域に分布し、19、21、22は、邑久領域に分布した。

多肥北原西遺跡

第3図は多肥北原西遺跡より出土した須恵器（第6図26～37）の産地推定をした。その結果、32（高台付杯身）は邑久領域に、それ以外は十瓶山の領域に分布した。

多肥北原遺跡

第4図は多肥北原遺跡から出土した須恵器（第6図38～44）の産地推定をした散布図である。39（杯蓋）が邑久領域に、それ以外はすべて十瓶山領域に分布した。

西末則遺跡

第5図は西末則遺跡出土須恵器（第6図45～53）の産地推定結果である。この遺跡出土の須恵器はすべて、十瓶山の領域に分布した。

まとめ

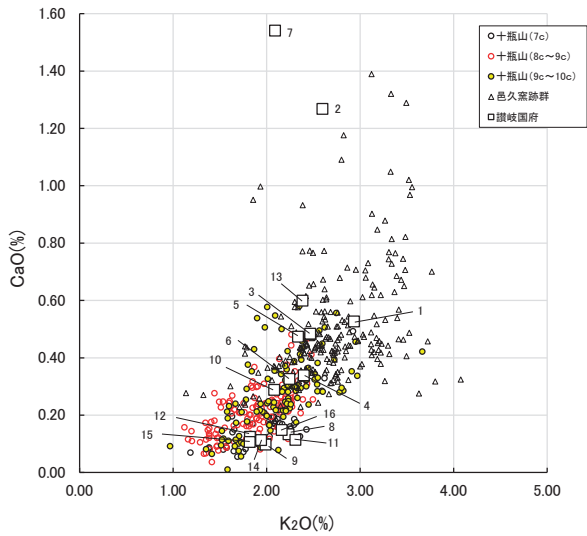
各遺跡出土須恵器の産地推定を実施した結果、ほとんどの須恵器が、十瓶山窯跡群から供給されていることが推定された。しかし、なかには邑久窯跡群の領域に入る須恵器もあり、今回の分析では、邑久から供給されたことが推定された。また、讃岐国府跡より出土した2（椀）、7（高杯）の須恵器は、邑久の領域にも分布しないことから今回の分析では、産地がはっきりしなかった。

今回の産地推定の分析では、讃岐国府跡、高松市内の遺跡、綾川町の遺跡など限られた遺跡出土須恵器の産地推定を実施したところほとんどの須恵器が十瓶山窯跡群と推定された。

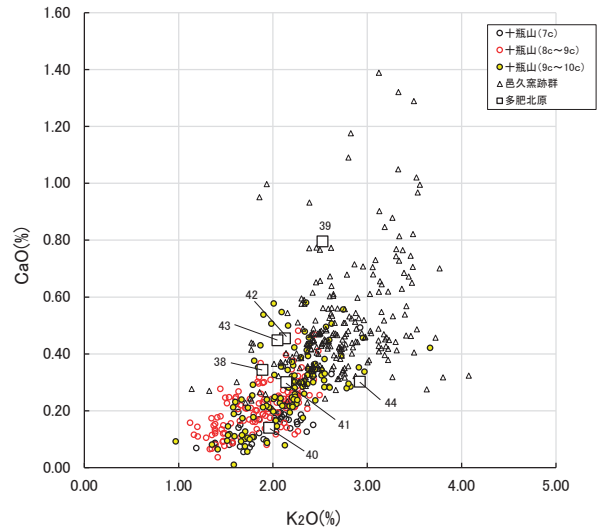
また、生産地須恵器が十瓶山窯跡と岡山県瀬戸内市邑久窯跡群の二大生産地との比較のみで生産地が限られたものであったが香川県内の消費地遺跡でも十瓶山の生産地以外の邑久からも供給されていることが推定された。今後の課題として、生産地および消費地遺跡の試料を増やし検討することで古代の須恵器の流通が解明されることが期待される。

引用・参考文献

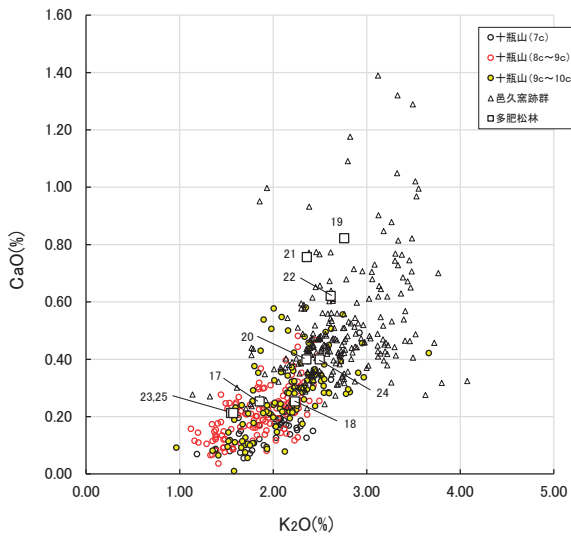
- 香川県教育委員会 2012『多肥北原遺跡』香川県埋蔵文化財センター編
- 香川県教育委員会 2015『多肥北原西遺跡』香川県埋蔵文化財センター編
- 香川県教育委員会 2015『西末則遺跡Ⅴ』香川県埋蔵文化財センター編
- 香川県教育委員会 2016『讃岐国府跡1』香川県埋蔵文化財センター編
- 香川県教育委員会 2017『多肥松林遺跡』香川県埋蔵文化財センター編
- 香川県教育委員会 2019『讃岐国府跡2』香川県埋蔵文化財センター編
- 佐藤竜馬 1994「十瓶山窯跡群の分布に関する一試考」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅱ』香川県埋蔵文化財センター編
- 三辻利一・渡部明夫 1992「綾南町周辺の窯跡出土須恵器の胎土分析について」『香川史学』21 香川歴史学会
- 森本 蓮・白石 純 2020「香川県十瓶山窯跡群出土須恵器の胎土分析」『半田山地理考古』第8号 岡山理科大学地理考古研究会



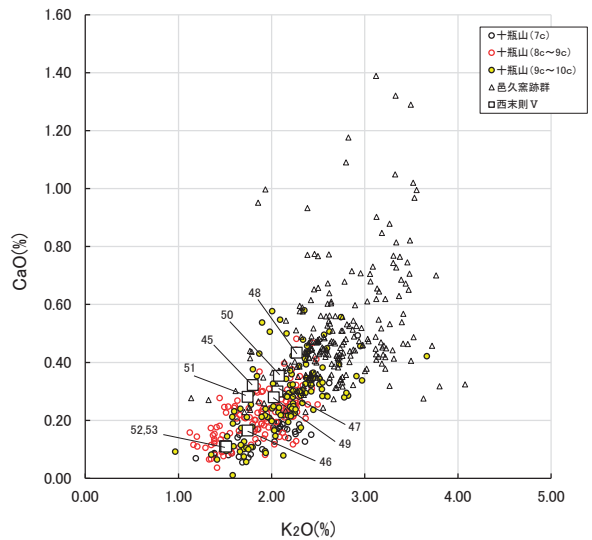
第 1 図 讃岐国府跡出土須恵器の産地推定



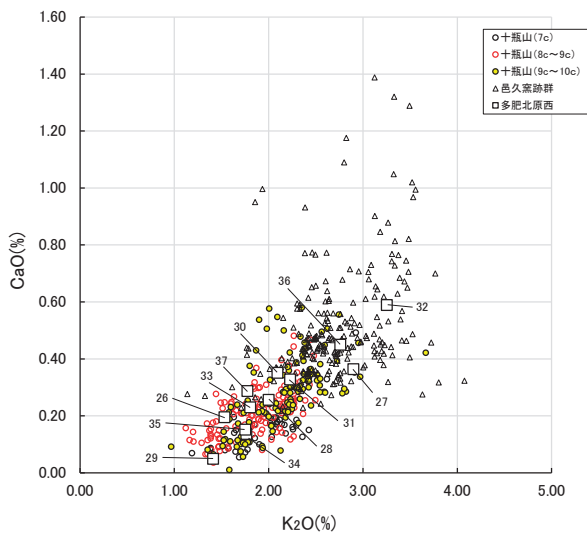
第 4 図 多肥北原遺跡出土須恵器の産地推定



第 2 図 多肥松林遺跡出土須恵器の産地推定



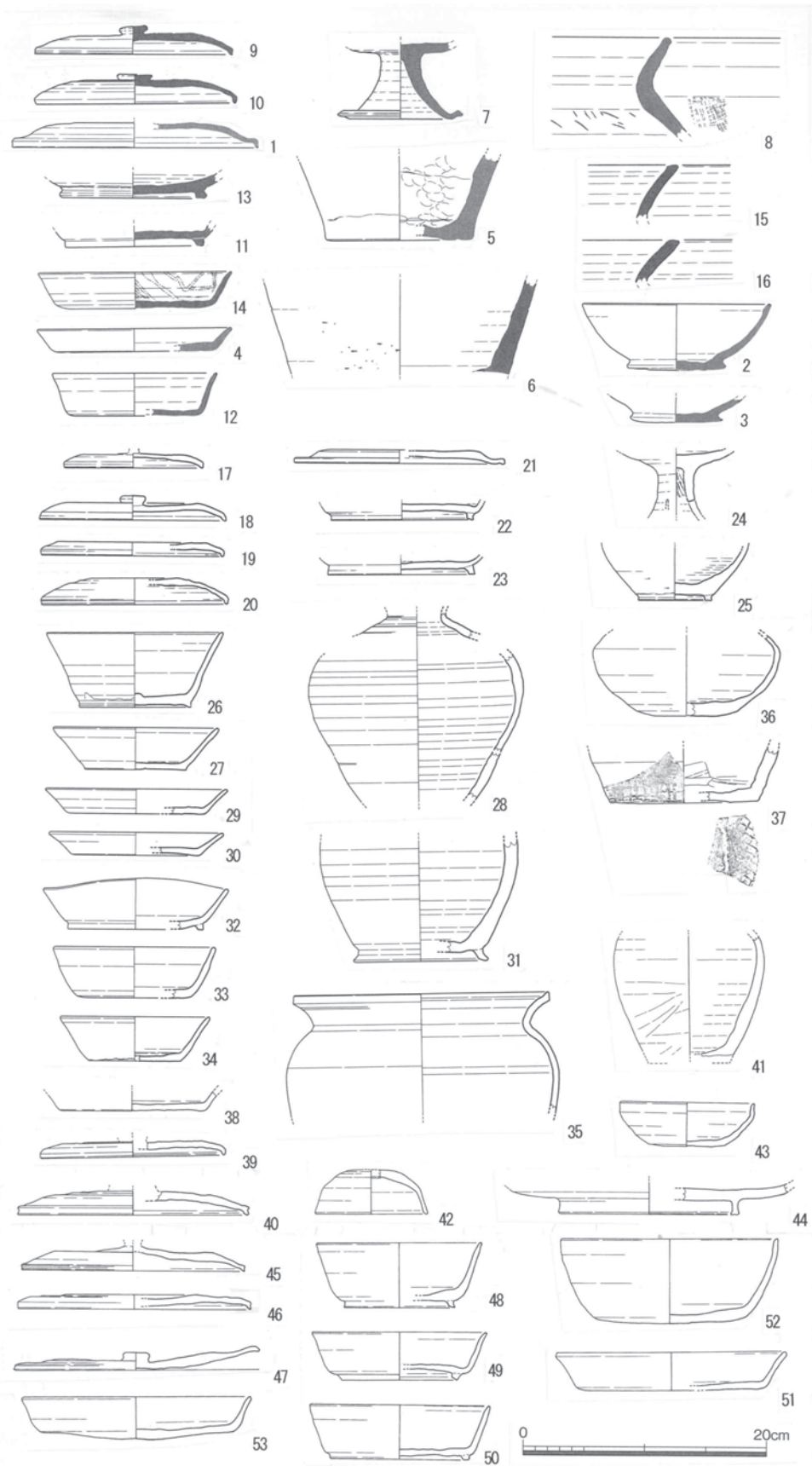
第 5 図 西末則遺跡出土須恵器の産地推定



第 3 図 多肥北原西遺跡出土須恵器の産地推定

第1表 香川県内遺跡出土須恵器胎土分析一覧表(%)

試料番号	遺跡名	器種	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅
1	讃岐国府 I	蓋	72.48	0.97	16.20	6.17	0.01	0.00	0.53	0.34	2.93	0.02
2	讃岐国府 I	椀	75.58	0.85	13.95	4.30	0.64	0.00	1.27	0.16	2.60	0.59
3	讃岐国府 I	椀	78.19	0.86	15.11	4.26	0.02	0.00	0.48	0.35	2.47	0.01
4	讃岐国府 I	皿	75.53	0.94	15.45	5.94	0.02	0.00	0.34	0.10	2.40	0.01
5	讃岐国府 I	壺	77.22	0.75	17.45	3.57	0.02	0.00	0.47	0.09	2.34	0.06
6	讃岐国府 I	壺	75.03	0.91	15.64	6.16	0.01	0.00	0.33	0.16	2.24	0.00
7	讃岐国府 II	高坏	72.87	0.77	17.87	4.58	0.02	0.00	1.54	0.32	2.09	0.00
8	讃岐国府 II	甕	80.99	1.18	14.96	3.59	0.01	0.00	0.13	0.00	2.23	0.02
9	讃岐国府 II	蓋	77.75	1.10	14.95	5.55	0.01	0.00	0.10	0.08	1.99	0.01
10	讃岐国府 II	蓋	72.55	0.95	16.78	6.55	0.01	0.00	0.29	0.27	2.08	0.01
11	讃岐国府 II	杯	79.61	1.09	14.57	4.43	0.01	0.00	0.11	0.16	2.31	0.02
12	讃岐国府 II	杯	75.37	0.89	15.14	6.81	0.03	0.00	0.12	0.16	1.82	0.06
13	讃岐国府 II	皿	74.69	0.87	15.85	5.89	0.03	0.00	0.60	0.13	2.38	0.04
14	讃岐国府 II	皿	79.82	0.90	14.34	5.00	0.01	0.00	0.11	0.10	1.94	0.00
15	讃岐国府 II	甕	80.69	1.16	14.72	4.17	0.01	0.00	0.11	0.06	1.82	0.01
16	讃岐国府 II	甕	79.64	1.13	15.21	4.04	0.01	0.00	0.15	0.10	2.16	0.01
17	多肥松林	蓋	69.26	0.96	16.76	8.64	0.01	0.00	0.25	0.19	1.86	0.00
18	多肥松林	蓋	76.31	0.87	14.27	6.30	0.01	0.00	0.25	0.33	2.23	0.01
19	多肥松林	蓋	69.71	1.02	17.02	6.73	0.03	0.00	0.82	0.47	2.76	0.00
20	多肥松林	蓋	78.46	0.95	16.96	3.15	0.01	0.00	0.40	0.13	2.36	0.04
21	多肥松林	蓋	67.35	1.18	17.48	7.77	0.04	0.00	0.76	0.37	2.36	0.01
22	多肥松林	杯	70.68	1.06	15.68	7.55	0.02	0.00	0.62	0.35	2.62	0.01
23	多肥松林	杯	79.86	0.90	16.37	3.59	0.01	0.00	0.21	0.10	1.55	0.02
24	多肥松林	高坏	77.99	0.79	15.75	3.92	0.01	0.00	0.40	0.30	2.50	0.02
25	多肥松林	壺	80.83	0.92	16.12	3.27	0.00	0.00	0.21	0.07	1.57	0.02
26	多肥北原西	杯	76.82	0.96	15.53	5.90	0.02	0.00	0.20	0.02	1.53	0.03
27	多肥北原西	壺	74.59	1.07	16.77	4.79	0.02	0.00	0.36	0.21	2.90	0.03
28	多肥北原西	杯	71.86	0.95	15.62	7.94	0.02	0.00	0.26	0.12	2.00	0.04
29	多肥北原西	皿	75.99	1.00	16.47	5.86	0.01	0.00	0.05	0.02	1.41	0.04
30	多肥北原西	皿	67.10	1.00	16.03	9.14	0.01	0.00	0.35	0.14	2.09	0.60
31	多肥北原西	壺	74.16	0.98	15.89	6.07	0.02	0.00	0.33	0.24	2.23	0.07
32	多肥北原西	杯	79.55	0.69	15.32	3.02	0.02	0.00	0.59	0.29	3.25	0.02
33	多肥北原西	杯	76.39	1.14	15.63	5.63	0.02	0.00	0.23	0.07	1.80	0.05
34	多肥北原西	杯	74.39	0.97	15.59	7.14	0.02	0.00	0.14	0.00	1.76	0.04
35	多肥北原西	甕	77.58	1.00	14.13	6.34	0.01	0.00	0.15	0.10	1.75	0.03
36	多肥北原西	壺	78.01	0.82	15.63	4.08	0.01	0.00	0.45	0.16	2.76	0.03
37	多肥北原西	壺	69.72	1.01	16.16	8.95	0.02	0.00	0.29	0.11	1.77	0.03
38	多肥北原	皿	69.68	0.97	15.69	9.15	0.02	0.00	0.34	0.04	1.89	0.07
39	多肥北原	蓋	64.76	1.18	17.68	8.80	0.02	0.09	0.80	0.29	2.53	0.24
40	多肥北原	蓋	80.24	1.24	15.17	3.72	0.01	0.00	0.14	0.12	1.96	0.06
41	多肥北原	壺	71.43	0.87	15.08	8.55	0.02	0.00	0.30	0.11	2.14	0.04
42	多肥北原	蓋	81.29	0.84	14.35	3.75	0.01	0.00	0.45	0.10	2.13	0.04
43	多肥北原	杯	78.45	0.88	16.26	4.06	0.01	0.00	0.45	0.01	2.05	0.04
44	多肥北原	皿	74.78	0.76	18.64	3.66	0.01	0.00	0.30	0.17	2.92	0.04
45	西末則 V	蓋	71.84	1.09	17.32	6.75	0.02	0.00	0.32	0.16	1.80	0.03
46	西末則 V	蓋	71.50	1.01	15.54	8.74	0.01	0.00	0.16	0.00	1.74	0.02
47	西末則 V	蓋	70.67	1.02	16.24	0.38	0.02	0.00	0.30	0.08	2.06	0.04
48	西末則 V	杯	76.30	0.98	14.47	6.01	0.02	0.00	0.43	0.17	2.27	0.03
49	西末則 V	杯	71.04	0.97	15.62	8.35	0.02	0.00	0.28	0.16	2.02	0.03
50	西末則 V	杯	71.78	1.05	16.98	6.74	0.01	0.00	0.35	0.16	2.08	0.04
51	西末則 V	杯	69.90	1.02	16.68	8.30	0.02	0.00	0.28	0.15	1.74	0.03
52	西末則 V	杯	79.39	1.10	13.67	5.87	0.01	0.00	0.11	0.03	1.50	0.04
53	西末則 V	皿	75.83	1.09	15.83	6.15	0.01	0.00	0.11	0.06	1.51	0.04



1 ~ 16 : 讃岐国府、17 ~ 25 : 多肥松林遺跡、26 ~ 37 : 多肥北原西遺跡、
 38 ~ 44 : 多肥北原遺跡、45 ~ 53 : 西末則遺跡

第6図 産地推定をした須恵器

1. はじめに

筆者は、令和元年度に県内遺跡調査業務を担当した。その担当時に、香川県警察より丸亀警察署龍川駐在所の建物が老朽化し、本年度に建て替え工事を実施する予定である旨の連絡があった。龍川駐在所は、善通寺市原田町 10246 番地に所在し、周辺の香川県教育委員会や善通寺市教育委員会による発掘調査等により、周知の埋蔵文化財包蔵地である五条遺跡の範囲に含まれる可能性が高い場所に位置していた。そこで、香川県警察本部会計課と協議を行ない、建て替え工事の前に試掘調査を実施し、遺構が確認され、現地での保存が困難な場合には、本発掘調査を実施することで合意した。調査は、調査員 1 名と発掘作業員 1 名を雇用し、重機は建て替え工事の業者が使用していたものを、香川県警察の了解を得て借用した。

今回の調査地は、平成 5 年度と平成 11 年度に香川県教育委員会が実施した、県道府中善通寺線改良事業に伴う調査地（森下 1994・塩崎 2000）の北側隣接地である。また、東側には、平成 27 年度の善通寺市教育委員会による民間開発に伴う調査地（松浦 2017）が位置する（第 9 図）。

令和元年 10 月 7 日～9 日において、2 本のトレンチを設定し試掘調査を実施した。官舎部分に設定したトレンチ 2 では、柱穴や土坑等の遺構を確認した。後述するように各遺構の掘り下げは行っておらず、時期を判断する根拠を欠くが、遺構埋土は後述する SD01 と近似する黒褐色粘土で充填され、SD01 と時期的に近接することが考えられる。一部攪乱を蒙っているものの、五条遺跡の集落域が良好に残存していることを確認した。また、浄化槽部分のトレンチ 1 では、平成 5 年度調査区の大溝 2、平成 12 年度調査区の大溝、平成 27 年度調査区の SD014 と一連の遺構である溝 SD01 を検出し、五条遺跡の環濠の一部と判断された。環濠は、現地表下約 1 m の位置で検出され、それは浄化槽の掘削深度より浅く、遺構の保存が

困難であることから、香川県教育委員会生涯学習文化財課と協議の上、急遽浄化槽部分について本発掘調査に切り替え、試掘調査の期間内において調査を実施することとした。なお、官舎部分については、遺構面と設計上の建物基礎との間に 0.5 m 以上の保護層が確保できることから、試掘調査のみで調査を終了した（第 2 図）。

遺構平面図は、平板測量により縮尺 1/100 で作成し、駐在所の敷地境界を図化して、全体図に落とし込んだ。断面図は、縮尺 1/20 で実測した。

遺物は、浄化槽部分の調査において、28ℓ入りコンテナ 5 箱の土器や石器が出土した。

今回の調査については、既に香川県教育委員会 2021 において概要を報告していたが、出土遺物については未報告であった。今回、調査内容の詳細を提示し、調査担当としての責を果たすこととした。

2. 五条遺跡

五条遺跡は、丸亀平野中央部、金倉川東岸の完新世段丘面上に立地する弥生時代前期後葉を中心とした環濠集落である。これまでの調査により、南北約 260 m、東西約 200 m の集落域が想定されている。森下英治等による旧地形復元図（森下 1994・塩崎 2000）によれば、金倉川旧流路に縁取られた紡錘形の微高地上に所在する。南縁を限る東西方向の旧流路を挟んで、南に時期的に先行する弥生時代前期中葉の環濠集落である龍川五条遺跡が所在する。今回の調査地は、五条遺跡推定範囲の北西隅付近に相当する（第 1 図）。

五条遺跡は、昭和 34 年（1959）に旧善通寺第二高等学校（現善通寺第一高等学校）龍川分校の隣接地で、農具舎を建設する際に多数の土器が出土したことから周知された遺跡である。その後、香川県教育委員会や善通寺市教育委員会により、公共事業や民間開発に伴い複数回の調査が行



国土地理院 25,000 分の 1 地形図「善通寺」の一部に加筆

第 1 図 遺跡位置図

なわれてきた。これまで小規模な調査が多く、遺跡の全体像の把握にまでは至っていないが、集落の経営期間等、明らかとなった点も多い。今後も、調査が積み重ねられていく中で、遺跡の詳細が明らかとなり、丸亀平野の弥生前期社会における本遺跡の意義が明らかにされることが期待される。なお、これまでの調査の概要については、海邊 2012b に詳述されており、ここでは省略し、調査成果の詳細については、後掲各報告書等を参照されたい。

3. 調査の成果

トレンチ 1 では、現地地表下 0.9 m は現駐在所建設時の盛土層が堆積し、その下で一部層厚 5 cm 程度の駐在所建設前の旧耕作土層を確認した。これら盛土層と耕作土層の下位で、上述したように溝 SD01 の埋土を検出した。

当初、SD01 の上面まで重機により掘削し、以下を人力により掘り下げて調査を行っていた。しかし、想定以上に遺構が深く、埋土は硬くしまり容易に掘り下げることが困難であったことから、調査期間を考慮して、上層の一部の掘り下げを残した段階より、重機により遺物を取り上げながら慎重に掘り下げを行った。したがって、上層出土とした資料に下層に帰属するものが含まれることになった点は否めない。

SD01 の埋土は 4 層に細分され、上下 2 層に大別する。上層(第 2 図 3 層)は黒褐色粘土、下層(同図 4～6 層)はベース層ブロック土を含む灰色～褐色粘土である。両層はいずれも水平堆積を基調とし、下層はブロック土を含むことから人為的な埋め戻し土、上層は埋戻し後の溝上面に生じた窪地を埋める自然堆積層と考えられる。遺物は、上層を中心に出土し、下層からは少量の土器等が出土した。

ここで、下層下位の 5・6 層について、記述しておく。いずれも 4 層下面で検出し、ベース層を溝状に掘り込む堆積層である。南側の 5 層は、検出面幅約 0.4 m、残存深 0.18 m 前後、北側の 6 層は、検出面幅 1 m 以上、残存深約 0.2 m で、両溝はほぼ並走して、環濠と同じ南西から北東に走行して検出された。そして、4 層とは色調や混入するブロック土の量が大きく相違することから、異なる時期の堆積層であり、3・4 層の環濠に先行する溝の可能性を、香川県教育委員会 2021 で指摘した。しかし、平成 5 年度調査区大溝 1 や平成 25 年度調査区 SD014 に、該当する先行溝は確認されていない点や、後述するように 6 層出土資料と 3・4 層出土資料に、大きな時期差が認められない点から、本層も 4 層に連続する堆積層と理解し、以下報告する。隣接地でより良好な資料の出土を待って、検証することとしたい。

なお、SD01 埋土のうち、上層は平成 5 年度調査区大溝 1 の中層に、下層は同下層に、色調や土質からそれぞれ相当することが考えられ、それは遺物の出土状況とも整合的である。

出土した遺物は第 3～8 図に示した。すべて SD01 出土資料で、1～19、21～42、44～54、56～78 が上層(3 層)、43・55 が下層(4 層)、20 が下層(6 層)出土である。

1～5 は壺の口縁部片である。1 は小形の壺で、内傾する頸部より緩やかに折り返して小さな口縁部を成形する。2 は、外傾して開く頸部より、口縁部は鈍く屈曲して短く開く。端部にヘラ描沈線を 1 条施す。3 は緩やかに外反して開く口縁部を有し、端部は小さく下方へ拡張して、内傾する端面をなす。4 も、端面に 1 条の沈線を施す。5 は、頸部に無刻みの突帯を 3 条貼付する。6～9 は壺の胴部片。6 は最大径付近に 3 条の突帯を貼付し、やや大きめの刻み目を加える。7 は突帯 1 条を貼付する。8 は、低い刻み目突帯 2 条を貼付し、その上位に 6 条の櫛描直線文で飾る。9 は、3 条の刻み目突帯を貼付する。

10～17・30 は、器表面のハクリ等が顕著な 10・14～16 等を含め、無文の逆 L 字形口縁甕とした。12 は、口縁部に厚さ 5 mm 程度の矩形の粘土紐を貼付し、突出度は低い。

18・19・22～24・26～29 は逆 L 字形口縁甕である。18・19・22・24・29 は、口縁部に刻み目を施し、18・22・24 の胴部には半裁竹管状工具による多条のヘラ描沈線文を、19 は 8 条以上の櫛描直線文、29 は口縁部下に 3～4 条の櫛描直線文と間に山形文を加える。21 も、櫛描直線文と間に山形文を配した胴部小片である。27 は、多条の櫛描直線文とその下位に刺突文を施すが、器表面の剥落等により条数等は不明である。28 は、14 条の櫛描直線文で装飾する。20・25 は、口縁端部よりやや下がった位置に突帯を貼付して、下位に複数条のヘラ描沈線文を加える。

31 は、如意形口縁の甕で、頸部に 3 条のヘラ描沈線文を施す。

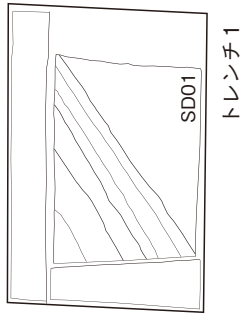
32・33 は、蓋の天井部の破片。いずれもツマミ部は円筒状に突出し、上面は窪む。34 は蓋として図示したが、細片で内外面の調整も不明なため、別の器種となる可能性がある。胎土中に雲母細粒を含み、搬入資料の可能性が高い。

35 は鉢として図化した。内面の器表面がハクリ・マメツして調整等が不明なため断定はできない。36 は鉢である。口縁部は内外に拡張して、上面に平坦面をなす。

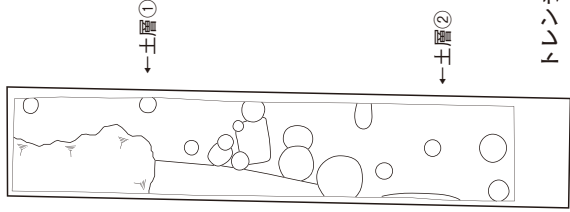
38～56 は、壺または鉢の底部片であろう。37・38・54 等の上げ底気味を呈するものと、56 等のやや凸面状を呈するもの、その他多数の平底のものがある。53 は、大形壺の底部片である。57・58 は小型品で、鉢の底部となろう。59～71 は甕の底部とした。38・58・63 の胎土中には、雲母細粒を含み、搬入品の可能性が高い。

72 は、サヌカイト製の石錐である。基部の側縁稜線部は敲打により刃潰しを行い、先端部は折損する。73 は、緑泥片岩製の磨製石庖丁である。紐掛け穴 2 孔を認める。表裏面に剥離痕と背部に一部折損がみられ、その後も刃部を中心に研磨を行い再加工している。74 はサヌカイト製品で、図左面の左側縁の一部に自然面を残す。また、図右面を中心に磨滅痕が認められ、打斧等として使用した後破損のため、図左面の下及び右側縁に敲打を行い石核に転用した可能性を考える。なお、下縁部は直線状を呈し、微細な剥離痕がみられることから、一時削器として使用された可能性がある。

75・76 は、いずれも砂岩の円礫を利用した叩



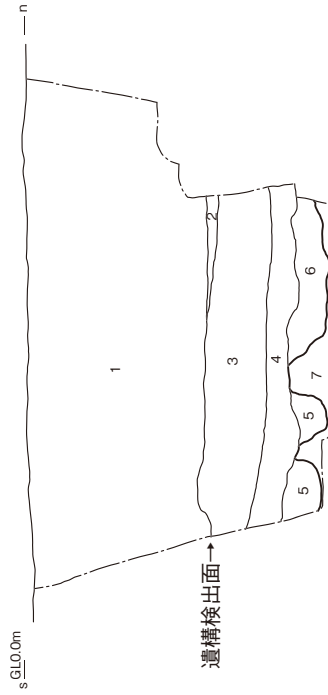
トレンチ1



トレンチ2

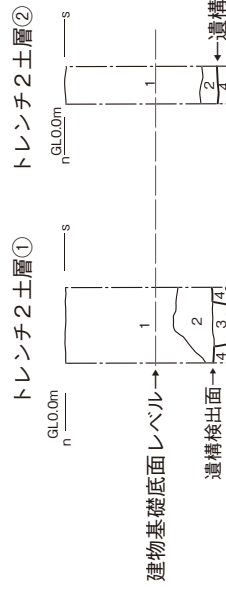


トレンチ1西壁土層



トレンチ1西壁土層

- 1 機頭・盛土
- 2 旧耕作土
- 3 10YR3/2 黒褐色粘土 (Mn 多、炭化物粒含む、土器多量を含む、SD01 上層)
- 4 NS/ 灰色粘土 ~ 10YR5/1 褐灰色粘土 (Mn 多、径 ~ 10 cm のベース層ブロック土含む、SD01 下層)
- 5 N4/ 灰色粘土 (径 ~ 20 cm のベース層ブロック土多量を含む、炭化物粒少量含む、SD01 下層)
- 6 N4/ 灰色粘土 (径 ~ 10 cm のベース層ブロック土多量を含む、炭化物粒少量含む、SD01 下層)
- 7 2.5Y7/1 灰白色粘土 (Fe、ベース層)

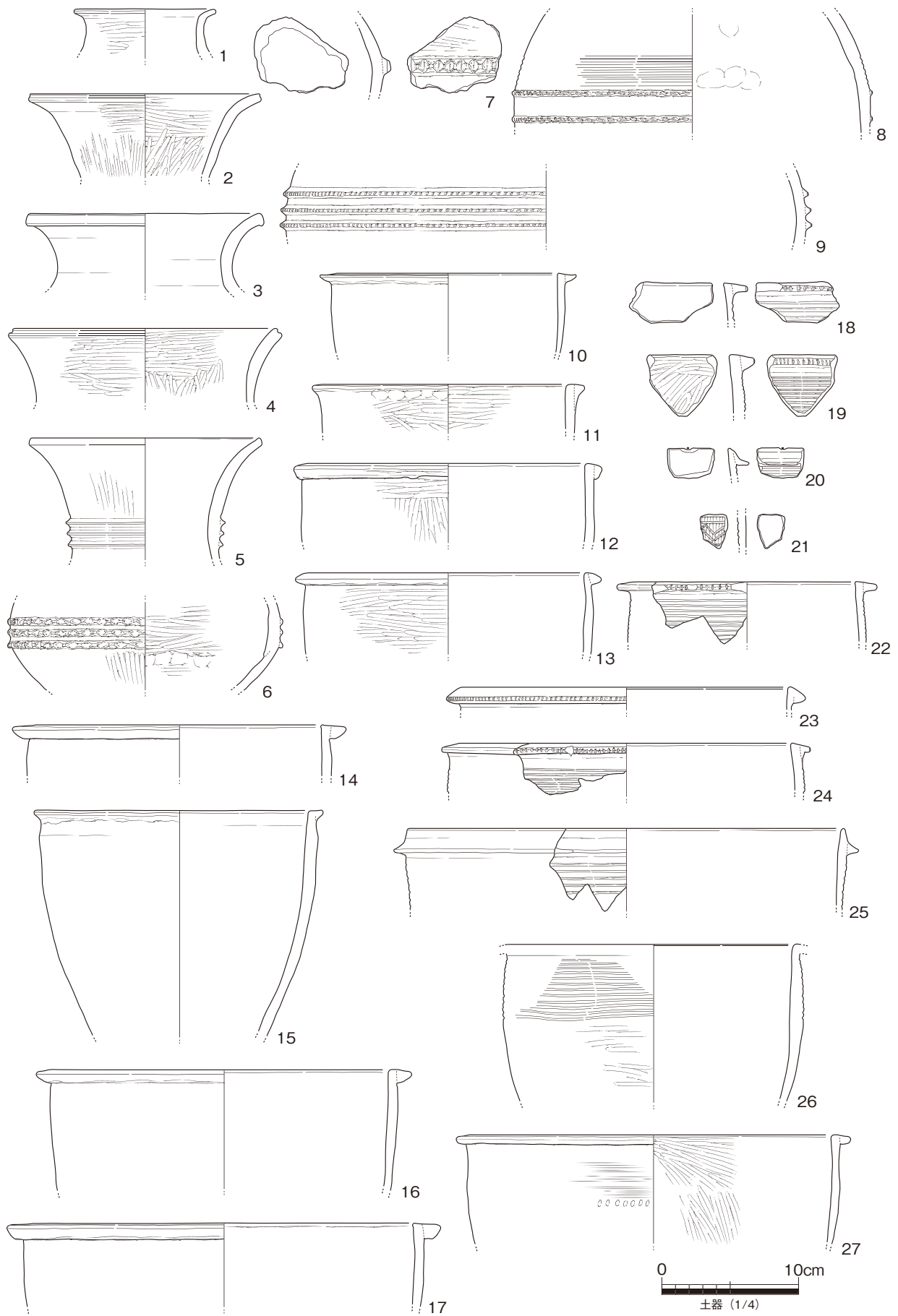


トレンチ2東壁土層

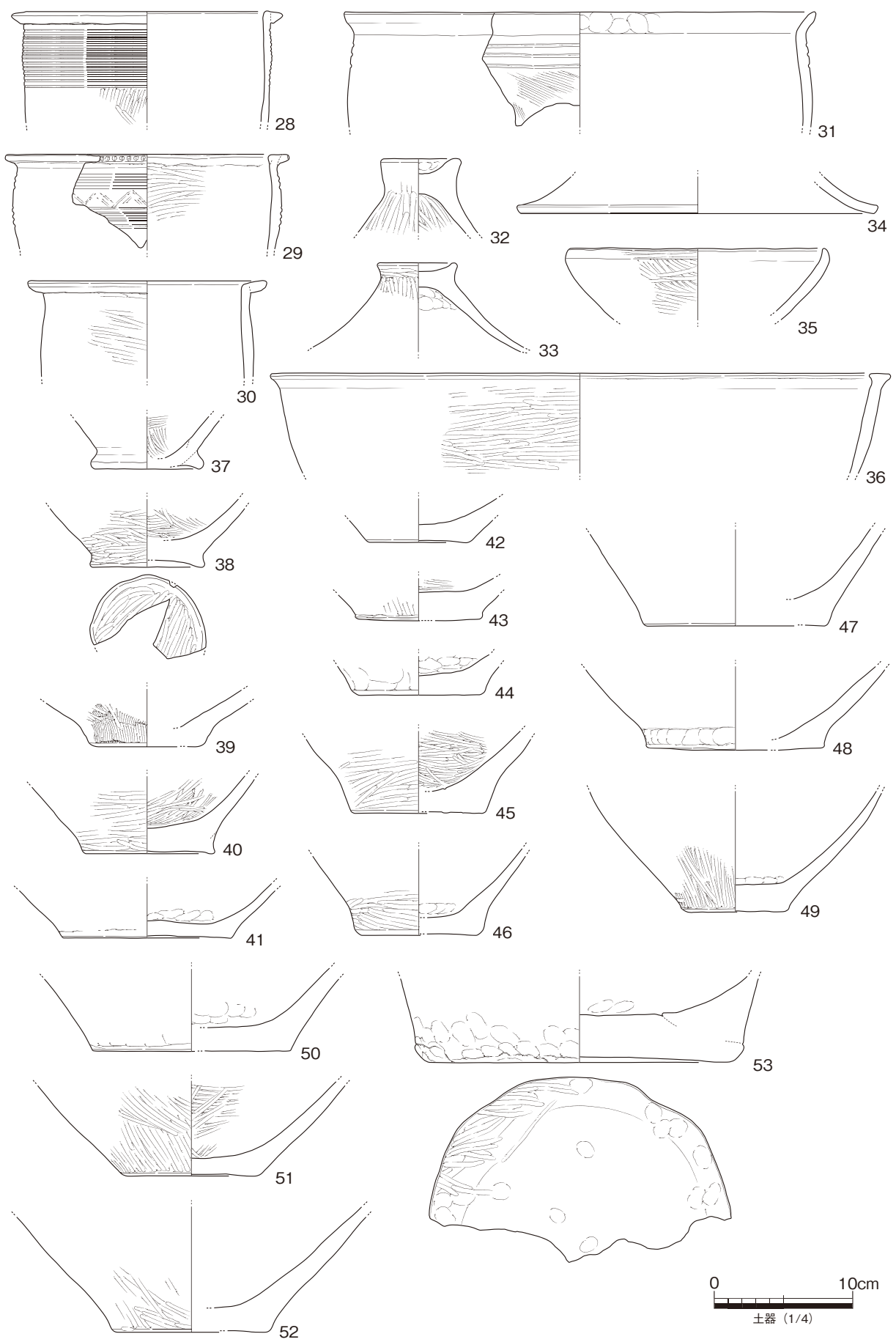
- 1 機頭・盛土
- 2 2.5Y7/1 灰白色粘土 (Fe、旧耕作土)
- 3 10YR3/1 黒褐色粘土 (Mn 多、径 ~ 3 cm のベース層ブロック土含む、Pit埋土)
- 4 2.5Y7/1 灰白色粘土 (Fe、ベース層)



第2図 トレンチ1・2平・断面図



第3図 出土遺物実測図1



第4図 出土遺物実測図2